

## 資料紹介

### 柏井園の留学日記

——新資料の翻刻（抄）と解題——

今 高 義 也

### はじめに

植村正久の高弟の一人で、東京神学社教頭・千駄ヶ谷教会牧師を務めたキリスト教史家・新約学者の柏井園（一八七〇—一九二〇）の生涯において、一九〇三年秋から一九〇五年春にかけての米国留学（ユニオン神学校およびコロンビア大学）は、重要な意味をもっている。一八九三年秋に郷里高知から上京して十年、明治学院神学部講師として教鞭をとる傍らイエス伝研究に着手し『基督伝之転機』（教文館、一九〇三年五月）を世に問うた柏井が、『福音主義の歴史神学』という方向で自らの信仰的／神学的立場を見定めつつあった時期に、この留学の機会を訪れた。一方、帰国後東京神学社においてなされた講義の草稿をもとに執筆されたとみられる『基督教史』（日本基督教興文協会）は、留学からおよそ十年を経過した一九一四年八月に上梓されている。柏井にとってこの留学が「其の生涯に於ける

一の回転機」（川添万寿得「柏井園氏小伝」『柏井全集』第一巻、警醒社、一九二二年、八〇九頁。以下「小伝」となったことは疑いない。

しかし米国留学をめぐる柏井の伝記的事跡は、これまで断片的にしか明らかになっていなかった。本発表では、東京神学大学図書館における柏井関係の資料調査でこのほど見出された留学日記（以下《日記》）の翻刻（抄）と解題を通して、柏井の思想形成における留学時代の意義について考えたい。

### 一 留学関連資料・先行研究と問題の所在

柏井の留学時代について、これまでに明らかになっている事項・資料と先行研究、及び検討すべき諸問題は次の如くである。

#### 『福音新報』——留学期間と同行者

留学への出立と帰国の日時については、『福音新報』（以下『新報』）「彙報」欄に次のような記事がみえる。

- ▲柏井園、光小太郎、市村竹馬の三氏は、去二十五日出発渡米せられたり（第四二六号、一九〇三年八月二七日）
- ▲柏井園氏は九月二十三日海陸無事ユニオン神学校に安着せらる▲市村竹馬氏はユニオン神学校に入学せられたり（第四三四号、一九〇三年十月二二日）
- ▲柏井園氏 二年間米国紐育ユニオン神学校に留学されたる同氏は去る〔四月〕廿四日横浜着の加奈川丸にて無

事帰朝せられたり（第五一三号、一九〇五年四月二七日）

これまで公にされていた留学をめぐる具体的な日時の情報、以上にとどまる（ただし前掲『新報』四二六号「教勢」欄には「柏井園氏送別会」について次のように報じられている。「去〔八月〕二十二日一番町教会に於て開会席上外村、磯部、平井、佐藤の諸氏送別の辞ありたり」）。

同行者として看過できないのは同郷の友人市村竹馬（東北学院卒）である。後にみるように、柏井のユニオン神学校入学には市村の存在が大きく関わっていたとみられるからである。

#### 有島武郎書簡——伊予丸と大北鉄道の旅

偶然同船した者の中には、齋藤勇も指摘しているように（『なつかしき人々』『齋藤勇著作集』別巻、研究社、一九七八年、三〇一頁）、有島武郎がいた。一九〇三年九月五——一日付の家族宛の有島書簡には、次のようにある（太傍線は引用者、以下同）。

伊予丸／1903、九月五日／本船ハ今一時間十三ノットノ速力ヲ以テシヤトルヨリ約七百哩ノ海上ヲ馳走致居候（中略）／彼日云ふ可カラザル爽快ノ意気ヲ以テ横浜埠頭ヲ解纜致候テヨリ船ハ埠頭ヲ離ルム少程ノ所ニ止リ此ニ三等船客ノ檢疫有之 日没セントスル頃ニ観音、富津ノ砲台ヲ跡ニシ夜ニ入りテ安房半島ヲ回轉シ驀直ニ北行シテ二十六日ニハ早白砂モ青山モ見エヌ渺茫タル大海原ニ進ミ入り申候（中略）御送被下候方々ハ御覧ナ

サレシ如ク少子ノ室ハ右舷最端ノモノニ有之船窓ニツ有之候テ廊下ノ通行人少ク機関ノ音響モ船体ノ動揺モ余リ感ゼス所ニテ至極好都合ニ有之殊ニ同室者ハ新瀉日報ノ主筆ナル猪股ト云フ人ニテ年三十六新聞記者ニハ似合ハヌ無邪氣ナル好意アル人ニテ今ニ至ル迄互ニ助け合ヒテ大ニ便宜ヲ得申候 此外船中ニテ殊ニ知人トナリシ人々ハ中等客ノ中ニ久満（スタンフオール）ド大学卒業生東京ニテ一面識アリシ人）氏及其夫人アリ三等船客中ニハ森本、柏井園（明治学院教師學者的頭腦ト体度ト有シ最モ談ル可キ人）及他ノ二牧師アリ何レモ親切ナル好意ヲ傾ケ呉レ申候（中略）

種々ナル用ニ取籠メラレ手紙ヲ充分書ク暇モ無之遂ニシヤトル出発之時ト相成申候 其後ノ事申上候得者九月二日ヲ二度致シ八日午後当地着 其後三日種々ノ事ヲ調ヘル為メ又市中見物ノ為メ三日ヲ費シ本朝八時三十分ノ汽車（大北鐵道）ニテ東部ニ向け出発致候事ト相成候（中略）／九月十一日／武郎

〔有島武郎全集〕第十三卷、筑摩書房、一九八四年、四九—五一頁）

この有島書簡は、米国東海岸への旅程の詳細を含め柏井の《日記》と相照らす点が多く、柏井研究の重要資料といつてよい（それは当然のことながら柏井の《日記》が有島研究にとつても重要な新資料であることを意味する）。「學者的頭腦ト体度ト有シ最モ談ル可キ人」との文言には有島の柏井に対する畏敬の念が感じられるが、柏井と有島が短時日のうちに良好な関係を築いたことは、《日記》からもうかがわれる（後述）。

## ユニオン神学校入学の背景——大内三郎説

前引のごとく『新報』に報ぜられた柏井のユニオン神学校入学は、しかしおおかたの予期に反したものであった。大内三郎は第三回明治学院理事員会記録（一九〇四年三月二四日付）を引いて次のように指摘している。

最初日本を出発する際、プリンス頓神学校に留学することになっていたが、あちらの米國に到着するやユニオン神学校に変わったという。明治学院理事〔員〕会記録によると、ユニオン神学「校長ホールノ尽力ニテ奨学金ヲ受ケ且ツ其ノ家族ヲ扶助スルニ足ルノ資金ヲ得ルコトナリシヲ以テ」留学中明治学院より俸給を出さないことになったという（『井深棍之助とその時代』第三卷）。後になって佐波亘氏も言及していることがわかったが、結局この留学先き変更の件にはその年起的植村の明治学院神学部にて使用のテキスト事件が絡んでいると考えらる。（植村正久と柏井園——『植村正久年表』から——『植村正久論考』、新教出版社、二〇〇八年、一九四頁）

大内という「テキスト事件」とは、植村がクラーク（Clarke, William Newton 1841-1912）の『キリスト教神学概説』（*An Outline of Christian Theology*, New York: Scribner, 1898）をテキストに使用していたことについて明治学院神学部教授のフルトン（Fulton, Samuel Peter 1865-1938 米国南長老教会派遣宣教師）から自由主義的であるとの批判が出たことが一つの契機となり、植村が明治学院を辞する（一九〇三年二月）ことになったというものである。大内はこの「事件」に着眼し、次のように推定している。

この米国（南）長老教会を支えているのが保守主義的なプリンス頓神学校で、またその教職はプリンス頓神学校出身のものが少なくなく、プリンス頓神学校は彼らの牙城であった。それだけ植村にとって自分に近い柏井のそのプリンス頓神学校留学は好ましいことではなかった。そこで彼の神学的立場からしても満足できるユニオン神学校のしかも親しいそのホール校長に柏井を頼みこみ、その結果プリンス頓神学校に留学する筈の柏井は急遽ユニオン神学校にvari、前記のごとく柏井は破格の待遇を受けた（前掲書、一九六頁）。

他方、川添万寿得による「小伝」には次のようにある。

其の頃ユニオン神学校の校長ホル博士日本に遊ばれたるに会し、之と相談熟して明治三十六年九月米国に遊び、ニウヨルク市のユニオン神学校に入り、コロムビア大学にも学びて、明治三十八年三月に至った（「小伝」前掲書、二頁）。

川添は、柏井のユニオン神学校入りは折しも来日したホール校長（Hall, Charles Cuthbert 1852-1908）と柏井との間に「相談熟して」実現したものだという。これは身近に接した友人の証言として留意すべきだろう。とすればプリンス頓神学校に留学する予定で米国に渡った柏井が「到着するや」ユニオン神学校にかわったという先の明治学院理事員会記録をどう解すべきか。大内はその背景に、植村の強い意志が働いていたとみているのである。

かように不透明さを残す留学先変更の事情について、《日記》は柏井自身の〈証言〉を含んでいる。詳細は次節で

検討したい。

### 白井慶吉の回想——ユニオンにおける研鑽の内容

柏井のユニオン神学校における研鑽の具体的内容はほとんどわかっていない。東京神学社の教え子である白井慶吉の「碩学A・C・マギファート教授に負うところが少なくなかった」（謙讓・温情の学者 柏井先生の思い出）、『キリスト新聞』二九四号、一九七〇年六月二七日）という証言が唯一の例外といつてよい。A・C・マギファート（McGiffert, Arthur Cushman 1861-1933）の『使徒時代基督教史』（*History of Christianity in the Apostolic Age*, New York: Scribner, 1897）を柏井が自らの『基督教史』執筆に際して参照していたことはほぼ間違いないと思われる（同書十四頁）、実際マギファートに師事することがこの留学の一つの目的であったように、《日記》からは見受けられる（後述）。

なお柏井が『福音新報』に連載したヨハネ伝の注解とC・E・ノートン（Norton, Charles Eliot 1827-1908）の『ダンテ論』（*Dante Studies*, 出版年と出版社は不詳）の翻訳は留学中に取り組んだ仕事として知られているが、『日記』からはその執筆の様子をうかがうことができる。

この他の留学中の研鑽内容、すなわち柏井がユニオン神学校で聴講した講義、読書リスト、提出したレポートや論文等についてはこれまで不明であったが、『日記』の記述によってその一部をうかがい知ることができる（後述）。

### 「教養の神学」の由来

《日記》には、留学生活における聴講・読書・聖書研究、礼拝や聖餐式への出席などの事跡が記される一方で、柏井自身の思索の跡が所どころに残されている。その主体的思索の営みは、けだし熊野義孝のいわゆる「教養の神学」の由って来るところを示唆しているように思われる。ここでは先行研究として看過できない熊野の指摘を改めて引用しておきたい。

柏井園の神学的形成にはドイツ観念論とその感化のもとにある大陸神学は近くはなかったと思われる。しかし、彼はそれを主としてイギリスを媒介として学び取った様子が著しい。聖書研究や教会史習得には、少なくともも英訳された大陸神学書がいつも顧慮されている。しかも当時隆盛をきわめた宗教史学派の著作物が少なくはない。それにもかかわらず、柏井の学風がこの「新風」に巻き込まれないのは、他の一方にカント（イギリスに受容されたカント）が控えていたからではないか。柏井園の人格主義は大正期の官学の哲学思想家たちのそれとは無関係であるが、彼らよりも少しく早目にこの支柱を得て、かの〈革命的〉〈教養学崩壊的〉なドイツ新神学の跡を追わず、その教養を続けえたのだと思われる。官学におけるカント的人格主義の後退後、どういう現象が生じて来たかは、いま誰も知るとおりである。在野の思想家として、柏井の姿勢は今日もわれわれに多くのことを教えると思われる。

（熊野義孝「柏井園における教養の神学」『日本キリスト教神学思想史』、『熊野義孝全集』十二、新教出版社、一九八二年、三三五—三三六頁）



本研究の基本的関心も、柏井が「(大陸神学書の)『新風』に巻きこまれ」ず、「かの〈革命的〉〈教義学崩壊的〉なドイツ新神学の跡を追わ」ないで、「その教養を続けえた」理由を探究することにある。《日記》にみえる勉強と思索の跡は、その手がかりを数多く提供しているように思われる。

## 二 留学日記の翻刻と解題

《日記》の二頁にはブラックインクで「[明治] 36年8月24日」と記され、二頁には赤鉛筆による次のような記入が見える(以下、出典の注記がない引用は全て《日記》からの引用)。

Beware lest thou be led away by thy sufficiency Job 35 [36] 18

これは *English Reserved Version* (英国改訂訳旧約聖書、一八八四年) のヨブ記三十六章一八節の引用である。留学という「恵まれた状況の中で方向を過たぬよう心せよ」との自戒が込められているように思われる。

尚、《日記》の記された期間は一九〇三年八月二四日〜一九〇四年三月一七日で、それ以降の留学中の日記は所在が確認されていない。つまりこの《日記》は、柏井の留学期間(一九〇三年八月〜一九〇五年四月)の前半、およそ七か月間の記録ということになる。

以下、《日記》を翻刻しつつ、これまで明らかにならなかった点を中心に検討する。

## 1 旅程

### 出立

《日記》は、柏井が自宅を出た一九〇三年八月二日から始まっている。<sup>(1)</sup>見送りや同行者の顔ぶれ、慌ただしく検疫を済ませる様子、無事出港した際の感慨などが生き生きと綴られている。《日記》によると柏井は光小太郎・市村竹馬・二宮貞とともに伊予丸に乗り込んだ。柏井たちの部屋はおそらく集団部屋で（前引有島書簡によれば「三等船室」、その一角の「四畳位」のフロアーを「占領した」。

### 旅程

まずニューヨーク到着までの旅程であるが、《日記》によれば次の如くである。

- 八月二五日 伊予丸に乗船し午後三時に横浜港を出港
- 九月七日 西海岸ヴィクトリア港に停泊
- 九月九日 シアトル市に上陸、滞在
- 九月一日 大北鉄道に乗りシアトルを出発
- 九月一三日 セントポール着
- 九月一六日 バッファロー着 ニューヨーク中央線に乗換え
- 九月一六日 深夜、アルバニイ着

・九月一七日 朝、ニューヨーク着

以上二十三日間の行程であった。ニューヨークに到着した感慨を、柏井は次のように記している。

国を去りて二十三日の間精神爽快に肉体又健なるを得 長途の旅の楽しみを経験したり 今日この地に着するを得たるにつき神の恩寵を感謝し又この行の為に支援を受けたる故国の師友を記憶し又同行の人々を思ふこと 深からざるべからず

## 2 有島武郎らとの交流

たまたま同船した有島武郎、森本厚吉らとは間もなく交流が始まった。八月三〇日（日曜日）には「午後有島氏の部屋に集まりて礼拝す」とあり、九月一日には「有島森本二氏の著はす『リビングストーン伝』を読み居りしが午後之を読み終わりぬ」とある。おそらく有島・森本のいずれかから貸与されたものだろう。同日、柏井らの部屋で議論が起こり、「復活論より初まりて罪の論未来の論に及び内村論新渡部論に畢りぬ」とある。九月三日には有島の部屋で新聞記事について論じ合い、同六日（日曜日）は食堂に集まり礼拝をしている。

午後二時より中等の食堂に於て礼拝をなす 市村氏司会して讚美を歌ひ有島氏祈祷をなし phil.「ピリピ」第三章を輪読して後余と光氏と話を為す 余は約「ヨハネ」二章の□□につきて語り光氏は詩篇第九十の四に「己

が日を数ふることを教へて智慧の心を得しめ給へ」の一句につきて語る 久万氏祈りて閉会す

しかし同日夜にはまた「大議論」が起こり「論戦」は十時半に及んだという。その題目は「歴史に進歩あるや否／人のソールの道徳的価値／罪惡の實在」であった。その日の日記には、次のような記述が見える。

今朝有島氏余の愛する書を問ふ 余は答ふるに左の諸書を以てせり

Coleridge's *Aids to reflection*

Dante's

Green's *Short History of English People*

Gode's *Commentary on John*

Hugo's *Miserable*

Pascal's *Pensee*

平家物語

有島氏其他諸士の愛読書は巻末に記せり

有島に示された柏井の愛読書は、留学以前の柏井の思想を考える上で注目される。特にコールリッジ、ダンテ、パスカルは早くから柏井が傾倒した書き手であって、後に引く留学中の思索においても重要な位置を占めている。

### 3 ユニオン神学校入学までの経緯

#### 明治学院理事員会記録

ユニオン神学校（以下ユニオン）入学をめぐる《日記》の記述を見る前に、前述の大内論文において引用されていた明治学院理事員会記録の柏井の留学に関わる箇所を引いておきたい。

柏井氏出発ノ際ハプリンストン神学校ニ入ルノ目的ニシテ其不在中ハ其俸給ノ半額ヲ支給スルコトナリシガ米  
国ニ至ルヤ都合ニ依リユニオン神学校ニ入りホール校長ノ尽力ニテ奨学金ヲ受ケ且ツ其家族ヲ扶助スルニ足ルノ  
資金ヲ得ルコトトナリシヲ以テ爾来学院ヨリハ其俸給ヲ支給セザルコトトセリ柏井氏ニ於テモ固ヨリ之ヲ期セザ  
ルノミナラズ出発ノ際俸給ノ六ヶ月分ヲ前受シタル額ヲモ償還ス可キヤト照会シ来レリ而シテ事務員ハ同氏ノ功  
労少ナカラザルヲ以テ之ヲ償還スルニ及バズトセリ

（第三回明治学院理事員会記録、一九〇四年三月二十四日、『井深梶之助とその時代』第三卷、明治学院、一九七  
一年、四〇頁）

この「米国ニ至ルヤ都合ニ依リユニオン神学校ニ入りホール校長ノ尽力ニテ奨学金ヲ受ケ且ツ其家族ヲ扶助スルニ  
足ルノ資金ヲ得ルコトトナ」ったという消息に関わる記述が、『日記』中に見いだされるので、次項で検討したい。

## ユニオン神学校入学の事情

ニューヨーク到着後、ユニオンへの入学が決定する前後の《日記》は次のごとくである。

〔一九〇三年〕九月十八日（金）午後福原氏その他一人に案内せられてセントラル、パークに散歩す 五時にホール氏を訪ふの約あり今朝同氏より市村氏への返書に同時間に来訪ありたしとの事なりしによる ホール氏の家族□まで帰らず氏独りなりし 余等を歓迎し 余等市村氏の事を相談して入学し得ることに定まり 次に余は学校との関係の顛末を語りしに、深く同情を表し且つ宣教師の所為を憤慨するの色表はれあり 結局若し余にして家族を支ふる道を得ば自由に勉学し得べしとの事を語りしに氏も金額を問ひて後何か方法を講じ見るべしと云はれたり

九月二十日（日）（中略）午後一時午飯、二時半ごろより市村氏は神学校に行くにつき同行して学校の前にて別れ独りセントラルパークに入り貯水池の辺のベンチにて十八日来の日記を認む木葉黄□せんとして蕭冷の気身に沁む

九月二十三日（水）朝市村氏とともにユニオン神学校に至り記名して入校の手續をなす ホール氏に面接したるにホール氏は日曜日に出だしたる手紙を受取りしやと問ふ 余之を受け取らざる旨を答へたるにホール氏は□書□の目的につきては委しきことは今話す時を有せざれども 家族に送るべき三十円の金は今其の道を開きつゝ

あれば 今日は兎に角入学の手続を為すべしとの事なり□□□□ 入学の事は済みたれば市村氏と□□公園を散歩し帰る中心の喜び動きて禁すべからず、昨年来の苦戦漸く勝利を得て□□宿望を達するを得たるは誠に身に余る幸にして 明に余を導いて爰に到らしめたる神の恩寵感謝し尽きず 而して植村先生とホール氏の厚情感謝するに堪へたり

九月二十四日(木) 植村先生に葉書を以て入学の事を報ず

〔九月〕29(火) 井深氏へは Union に入学したることを報じたり

〔九月〕30(水) 午後 Hall (□□) 氏に面会せしに氏は予の家に送金する為に或る友人より八月の間15□を得るの道を開き居れりとの話なりき 十一月より之を送れば来年六月までを凌(□?)くに足れり 7, 8, 9の三月間家族を支ふる為にはそれまでに本でも(□)書き置く必要あり

十二月七日(月) 朝、日本ヨリノ郵便着ス (中略) 井深氏ヨリハ理事委員会ノ事ニ関スル決議ノ結果ヲ報ジ来ル

注目されるのは、同行した市村のユニオン入りが先に決まっていることである(九月一八日)。この背景には、東

北学院で教鞭を執っていたクリストファー・ノッス (Noss, Christopher 1869-1934) からホールへの強い推薦があった。それが実を結び、ホールは市村のために既に「東洋奨学金」の制度を整えていたのである。<sup>(2)</sup> 柏井は市村の入学が決まったその場で、ホールに自分と「学校〔明治学院〕との関係の顛末」を語った。するとホールは「深く同情を表してくれ」、かつその顔には「〔明治学院の〕宣教師の所為を憤慨するの色」が表れてさえた。結局その場では結論は出ず、柏井が尚も「余にして家族を支ふる道を得ば自由に勉学し得べし」と訴えると、ホールは必要な額を問い、「何か方法を講じ見るべし」と答えた。

先にもみたように、明治学院理事員会記録によると、柏井は当初プリンストン神学校（以下プリンストン）に留学することになっており、かつ留学中の俸給（通常月額半額）の六か月分を前もって受領していた。それが「到着するや」ユニオンにかわったことを理由に、柏井はその俸給の償還を申し出ている。これらの事実と『日記』の記述から総合して推察されるのは、およそ次のようなことではあるまいか。

柏井はユニオンに入学したいとの意志を表明したが、明治学院理事員会（特にフルトンをはじめとする宣教師たち）がそれに反対し、プリンストンへの入学を留学中の俸給支給の条件とした。もしプリンストンに入らないなら、俸給は六か月分で差し止めると（半額なので事実上は三ヶ月分）。明治学院教授（一九〇三年四月）に任ぜられてめぐってきた留学の機会だけに、理事員会方針との折衝に柏井は苦慮した。結果的には理事員会方針に従う形で前金を受取り出発したが、柏井はユニオン入学への希望を捨ててはいなかった。それは、同行した友人市村が、確約はないながらもノッスやシュネーダー (Schneider, David Bowman 1857-1938) の力添えを得て、ユニオン入学への希望に燃えていたからである。仙台を訪れたホールにノッスが市村のことを語ったという一九〇三年四月の宮城中会春期学校に



は、柏井も講師として参加しており、ホールやノックスと席を同じくしている<sup>(3)</sup>。その帰途、福島に立ち寄って市村の伝道地で演説し、旧交を温めた柏井に、市村はノックスの支援によるユニオン入学への希望を語ったにちがいない。一九〇三年四月一〇日付の市村宛柏井書簡末尾にある「今夏はともに太平洋上の月を眺めて快談致し度ものに候」には、ユニオン入学への柏井の《希望》が垣間見える。市村と共に、自分にもユニオンへの道が開けないかとの一縷の望みを抱いて、柏井はアメリカに渡ったのではなかったか。

市村の入学決定の五日後（九月二三日）、ホールは奨学金と生活支援のめどがついたことを柏井に告げ、入学を許可した。《日記》には「中心の喜び動きて禁すべからず、昨年来の苦戦漸く勝利を得て□□宿望を達するを得たるは誠に身に余る幸」との喜びが記されている。ユニオンへの入学は、もちろん植村の支持もあったであろうが、何より柏井の「宿望」であったことが、ここから明らかに読み取れよう。

#### 4 聴講・自修・読書

##### 聴講科目

柏井がユニオンで聴講した科目は何であったか。《日記》には次のような記録が見える。

〔一九〇三年〕九月二十八日（月）今日より学校の稽古始まる マクギフェルト氏の教会史とノックス氏の宗  
教哲学の第一回を聴く

十月一日（木）McGiffertノ教会歴史ノ第一巻を買ふ

十月六日（火）今日より McGiffert 氏ノ 18th Century の宗教思想史の講義に出席す

十一月九日（月）McGiffert 氏病ニテ休ミナリ

十二月五日（土）コノ週間ハ割合ニ忙シカリキ 月曜日ニハ John 第十章ヲ注シ終リ、火曜日ハ専ラ Bushnell 伝ヲ全速力ニテ読テ木曜日之ヲ読ミ畢リ 金曜日ハ Hume ノ Natural History of Religion ガ Essay ヲ読ミテ梗概ヲ記スコトヲ始メ 今日午前中ニ之を卒ヘリ 教会史ノ教場ニテ読ム為也

十二月八日（火）今日 McGiffert 氏ノ稽古ニテ Hume ニ関スル paper ヲ読ム予定ナリシ故 McAlan 氏ニ之ヲ直シテ貰ヒ又読ムヲ聴キテ貰ヒシガ McI 氏ハ病氣ノ為ニ出席ナカリキ

十二月十五日（火）マギフェルト氏病氣の為全く稽古なし

一九〇四年一月四日（月）今日より学校の稽古始まる ノックス氏の講義あり

柏井はマギファートの教会史、同じく十八世紀宗教思想史、ノックス (Knox, George William, 1853-1912) の宗教哲学を聴講していた。マギファートの授業で発表するためにヒュームを読んだりしているが、マギファートは十一

月以降病気で休講となつてしまつたことが知られる。少なくとも《日記》に記されている期間は、ノックスの講義が中心となつた。《日記》の一月二四日には、

要するに今学年はマギファルト氏留守にて歴史を学ぶの便利を失ひたるを利用して歴史上の研究は来学年に譲りて今年に専ら思想の根本〔？〕を明にすることを勉めんとす

とある。マギファルトの病休を、自らの思想基盤を明確に据える好機として捉えようとしているのである。実際、自身の思想を整理する記述が日記の随所に見られる(後述)。

### 語学の自修

語学習得のための自修は、柏井にとって留学における重要課題の一つであつたようである。

九月二十六日 昨日より独逸訳聖書にて約翰伝を読み始め今日は第一章の後半を読み

十月六日(火) 今日より Greek 語の独習をはじめ

十月十二日(月) 今年中ハ専ラ語学(英、独、希)ノ勉強ニ多クノ時間ヲ用ヒル事ニ定ム

柏井は後に『ヨハネ伝研究』の後半でギリシア語原文の私訳を付すことになるが、留学中の研鑽が実を結んだものといつてよいだろう。

### 読書と執筆

留学中の読書と執筆（論文・レポート等）はどのようなふうであったか。

十月六日（火）午後図書館にて八月の *Expositor* に載りし □□□氏の *Atonement and Modern mind* 十八一篇を読む

十一月七日（土）*Bushnell* 伝をヲ読ム

十一月十六日（月）*Bushnell* 伝をヲ読ム

十一月二十六日（木）*Bushnell* 伝ヲ読ム

十二月十一日（金）約翰伝十二章ノ前半ヲ注シ卒ル *Shepherd of Human* ヲ読ム

十二月十二日(土) ライブリイに入りて三年のアウトルックの中にてブシネルの秘訣と題する文章を読む 又室に帰りてポッカチョのダンテ伝の一部を読む

十二月十四日(月) 夜ブシネルの *Christ in God* を読む

十二月十五日(火) ヘルマスの「牧羊者」を読み畢る(中略) 午後「中央講演の銅像」と題する一詩を作る

十二月二十九日(火)(中略) バルナバの書簡ト第二クレメントを読む これにて *Apostolic Fathers (Light-foot)* を全く読み卒れり

一九〇四年一月四日(月)(中略) 夜帰りてブシネルを読む

一月五日(火) 午前ヨハネ伝を調べ且つ又ブシネルを読む

一月六日(水) チャスチンの第一弁証論 [*First Apology*] を読みはじむ ヨハネ伝第十三章を注し終る ブシネルのキリスト神性論をを読了る

一月十二日（火）午前はライブラリイに入りてヂャスチンに関する論文の草稿を卒り午後は散歩して帰りて後  
ブンネルを読み（アトーンメントの章の始なり）注解を清書し、夜はヂャスチン論の全部を浄書す 今日□に  
気力ありて仕事のはか取りし日也

一月十四日（木）哲学総論を復習しパウルゼンの哲学総論を吉岡氏より借りて参照す 手紙来たらず恋郷の念  
禁じ難し 夜学校に出すべきヂャスチン論の再清書をなしりて湯に入りこの日記を記して寢床に入る

一月十五日（金）午前は哲学総論を調ぶ 午後は気晴らしのため三時頃より出でてスクリプチャーに行き□□  
□弗払ひ□□□□又クエーカーの僧の□□□□ Bookman (Dante Number) を買ひ Schleiermacher's  
*monologion* を注文しワナーメーカーの居「?」を見て帰る 愉快なりき

一月十六日（土）午前市村氏とダンテを談ず 夜は教会史の学記「?」を復習す

一月二十一日（木）午前は約翰伝を注す 午後公園に散歩す 空曇りて湿気多し 帰りて曾て作りかけて意に  
満たざりし「中央公園の銅像」を改□□して略ぼ脱稿せり

一月二十三日（土）午前はライブラリイに入りてホール氏に出だすべき論文を書く準備を為す

一月二十五日(月) 今日は稽古なき順(?)なり (中略) 午前にはホール氏に可出論文を稿しはじむ

一月二十六日(火) 今日より稽古始まる(中略) 夜はホール氏より課せられたる論文を清書す

一月二十七日(水) 論文をホール氏に出す 之にて重荷を一つ卸したり

二月一日(月) ヨハネ伝十六章を注し終る○ヨハネ伝注の十章より十四章後半までを福音新報に郵送す(中略)  
「中央公園の銅像」の歌を新報宛に送る 健康の注意を怠りぬ 今日より大に注意すべし

やはり目立つのはブッシュネルへの傾倒であろう。ブッシュネルは柏井特愛の神学者として帰国後しばしば言及されることになる。

### 読書の回顧

一九〇四年一月、柏井は新学期のスタートの前に、渡米以来の読書リストを整理し、今後の目標について書いてい

る。  
一月二十四日(日) 空晴れ風吹く朝飯後公園を散歩して帰り心静に神に祈りぬ

今日の日曜日を分界として新しき学期に入らんとす 年の始には妨げらるること多くして静思の時を得ざりし故

今日は過去の半年を回顧するに最も良き日なり

此の学校に入り満足して勉強したること、身体の丈夫なりしこと、□□に困窮せざりしこと、留守にも一同恙無かりしこと、親しき者の次第に救に近く事、いづれも感謝に堪へず 神は我を愛し給ふこと明なり

前途の事を考ふれば種々不定に感じ心配すべきこと多けれども、それは神我をして信仰によりて歩ましめんと熱心なることを思へば寧ろ感謝して、信なきを助け給はんことを神に祈るべきなり 昨日より我は信仰の必要を感じることも多し

この一学期間読みたる書は

*Montgomery's History of U.S.*

*Life and Letters of Bushnell*

*Apostolic Fathers (Lightfoot)*

*Justin's First Apology*

*Bushnell's God in Christ*

*Hume's Natural History of Religions*

来学期を通してノックス氏の有神論を聞く傍有神論を研究せんとす

其外に専ら勉強すべきは

二月中は 約翰伝注解 グリーキバイブル

三月中は ブシネルの書



四月中は シュライエルマヘル 独逸語

ドイツ語の自修のためでもあろうか、ブッシュネルに影響を与えたシュライエルマッハーに取り組もうとしているのが注目される。一九〇四年一月十五日には「Schleiermacher's monologion」を注文」とある。柏井の神学思想の形成における「大陸神学書」の影響を考える上で留意すべき事実であろう。

## 5 思索の跡

霊なる愛——キリストを経て人を愛す

一九〇三年十月から十二月にかけて、『日記』には注目すべき思索の跡が見出される。

十月十二日（月）朝六時□分に起き出て冷水法をなし体操場にて運動をなして後室に帰り祈祷ス（中略）  
John 10ヲ讀ミ我は門ナリトノ基督ノ言ノ味ヲ感ズ 余ハ祈リタリ 基督ヨ爾ヲ思ヒ爾ヲ経テ人ヲ愛シ人ノ為ニ  
□レバ如何ニ善キ心願スラスルコトヲ得ベキゾ 爾ヲ経ザル故ニ靈ナル愛ニ乏シク苦キ思多し 基督ヨ爾ノ門ヨ  
リ出入スルヨウニ導キ給ヘ

十月二十三日（金）朝祈リス 天ニ父ナル神在マシ子ナル基督今モ世ニアリテ我等ノ救主トセリ 我等ハコノ  
救主ニ導カレテ永遠ノ生命ニ入り得ルトノ真理ハ一筋ノ光ヲ以テ微ナガラ心ニ触レ云ヒ難キ感ヲ生ゼシメタリ、  
神ヨ 我等ヲメコノ真理ヲ学バシメ給ヘ 神ヨリ教ヲ受ケシメ給ヘ 而メ後人ヲ教フルニ足ルモノタラシメ給ヘ

アムメン

十月二十九日（木）神キリストヲ愛シ給フ如クキリスト我ヲ愛ス　コノ大ナル又奧妙ナル真理ヲ一層深く思ヒ之ヲ悟ル事ヲ得シメ給ヘ　コノ後□□我ト神トノ關係ヲ考フルノミニアラズシテ神トキリストトノ關係ヲ学ブニ至ラシメ給ヘ　然ル後我ニ反ルヲ以テ真ノ道ナリト思フ也

十一月十二日（木）夜　七時半ヨリ Chapel ニテ聖餐式アリ　暫クコノ式ニ列セザリシ故ニコノ夕ノ式ハ敵ニメ我ガ心ノ改マルヲ感ジタリ　キリストヲ一層愛スベキコト、キリストヲ經て人ヲ愛スベキコト、己ノ罪深くメ靈ナル事ニ注意ヲ集ムル力ノ乏シキコト等ヲ感ジタリ

十月十二日、注解に取り組んでいたヨハネ伝の十章の「我は門ナリ」との言葉から、「基督を經て人を愛す」との柏井独特の表現が現れているのが注目される。久しぶりに聖餐式に列した日の所感を記した十一月十二日にも同様の言葉が見える。そこにある「己ノ罪深くメ靈ナル事ニ注意ヲ集ムル力ノ乏シキ」という「罪」の自覚や、「天ニ父ナル神在マシ子ナル基督今モ世ニアリテ我等ノ救主トセリ　我等ハコノ救主ニ導カレテ永遠ノ生命ニ入り得ル」という「真理」が「一筋ノ光ヲ以テ微ナガラ心ニ触レ云ヒ難キ感ヲ生ゼシメ」（十月二十三日）たという〈経験〉は、やがてより整理された形で、あらかじめ空白にされていた日記冒頭数頁にわたって記されることとなった。それを示唆するのが次の日記である。

〔一九〇三年〕十二月十七日（木）（中略）

ホール氏の家より帰りて後二時間計り祈り且つ思ふ 数日前より探り求めつゝありし 思想の系統漸く明になりし如く感ぜられて感謝を以て一時半寝に就けり その夜の所感、このノートブックの始に記し置けり

### 五箇条の目標

実際、《日記》の三百目からは、次のような〈五箇条〉が記されている。

一、先づ神の国と其の義を求めよ

「爾の家の為の熱心我を蝕はん」

知識は熱心の糧なり、我今より神の国の知識を得ることを努むべし

二、真理を尋ね求むべし

真理の経験に触れなば尋ね求むる心自ら生ぜん

三、キリストの心を己が心とすべし

我が裡に潜めるベストセルフは必ずキリストの心と通ふ所あり

キリストの肉を食ひ其の血を飲むとは如何なる意味なるかを思へ

ダンテの詩に感じミレーの画に愛しパスカル思想に感ずる心は之を深くしてキリストの愛に感じ得ざらんや

砕けたる魂を以て神に求めよ

四、靈なる愛を養ふべし

旅行は最も良き機会なり

千九百三年十二月六日朝之を記して後神に祈れり 祈る中大切なる

一箇条を脱せるに心付き之を書き加ふ

五、感謝すべし

過ぎ来し方の神の導の徳ありしことを思へ

之を思ふて忘るること勿れ

第二項に就き Continuous thinking の習慣を養ふの必要を感ず（十二月九日朝）

第一項から第五項までは「十二月六日朝」、第五項のあとの「第二項につき……」の一文は、「十二月九日朝」に記されたとみられる。他方、「数日前より探り求めつゝありし 思想の系統漸く明になりし如く感ぜられて感謝を以て」十二月十七日に記されたのが、おそらくは、先の〈五箇条〉に続いて記されている次の文章である。

鮮明なる意識

余は己の罪人たることを感ず 時としては心傲慢にして低き標準に照らして己を批評する故にこの感覚甚だ曖昧

なることあれども今神に祈りたる後の如きは此の感や、明なるを覚ふ。何によりて己の罪人たることを知るや先づ神に遠かれることによりて之を知る。神に遠かれることは靈なる事に対する神経の鈍きことによりて之を知る。即ち感すべき事に感ずる能はざる一事によりて我に罪のあるを知る。

斯の如くして罪を知る。それ果して正当なる道なりや。余は其の偏れるを知る。古より多くの人の説ける如く罪は意志に存すとせばこの処まで徹する必要があるをしれども姑く近き所より工夫を試みんとす。人は身を置く所の異なるに應じて感觸する処を異にす。身を置く処は如何にして定むるか、如何にして之を愛し得るか。

先づ思ふ一生面あり。即ち人は必ず何処にか身を置けり。然れども無意識なるものなり。多少明に意識せざるものなり。明に且つ意識するによりて人の人格は明になり知覚鮮明になる也。

自己の立つ処は他に対する関係によりて明なり。他との関係の主なる要素は托し托せらるる関係に存す。

(十二月十七日夜半)

柏井がしばしばコールリッジを引用しながら述べるところの「鮮明なる意識」への言及がここにもみられる。ダンテ、ミレー、パスカルをあげて、それらの作品に「感ずる心は之を深くしてキリストの愛に感じ得ざらんや」と述べているあたりは「教養の神学」の萌芽といふべきか。他方霊的な真理に対する「神経の鈍さ」に「罪」を見出す点や、真理を「感觸」する人間の可能性<sup>II</sup>ベストセルフに言及するなど、柏井が重んずるところの「感覚」や「神経」といった観念が注目される。《日記》巻末には、この記述を図示したようなメモも残されている。

## 6 「小歴史」としての日記

最後に触れておきたいのは、『日記』後半の、日露戦争の経過について記しているところである。

### 日露戦争

二月二十九日（夜）二十日の間日記を書くことを怠りぬ 我をしてこれを怠らしめし原因二あり 一は戦争なり 余り事多く甚大にして この小歴史の中に収め易からざるなり第二はヨハネの注解を完成するに□□□□せられしことこれなり この二十日の歴史はこの二を除けば余す所幾何もなし この二十日の間に日本の二千五百年の歴史に曾て有らざる大事件は演ぜられぬ 新聞の□の表紙に記し置きたる索引によりて春秋的に羅列すれば 二月八日夜半 日本の水雷艇旅順を襲ひレッピサン、サンウィツナ〔？〕の二大戦闘艦及び巡洋艇□ラチャ〔？〕に大破壊を与ふ（その戦報九日□正午頃にニユルヨーク新聞に載せらる） 同日□川に於て我艦隊巡洋艇バリヤブ〔？〕は砲艦コイエワを撃沈す

九日我艦隊旅順を砲撃して敵艦に大傷を与ふ

十日露国開戦を布告し 十一日日本之を布告す

十一日露艇日本近海に沈みて汽船一隻を沈む

十四日第三回旅順攻撃□□□を沈む

二十三日 朝鮮との条約調印せられ挑戦は日本の保護国となる

二十四日早暁日本軍汽船を旅順の口に沈めて之を塞がんとて成功せず

今は日本帝国の戦争□□而して「ウ」予はこの戦争の勝利に元気を鼓せられて机上の戦争をば今までに倍せる速力を以て進めたり この間に約翰伝の十七、十九、二十、二十一は起草をなし十五〇十七以下の浄書をなし二十七日午前三時に全く清書を卒りたり 健康を損せずして五月に亘る業を卒へて喜びに□□たゞ体はやゝ疲れてこの二三日は全く休戦なり

柏井は後年、日本政府の軍国主義路線に対して明確に異を唱えていくが、少なくともこの当時は、日露戦争の「勝利」にわく国民の一人としての柏井の姿がここにある。柏井は新聞を通して知らされる戦況に強い関心を寄せ、「勝利」の報に「元気を鼓せられて机上の戦争「ヨハネ伝注解の仕事」をば今までに倍せる速力を以て進め」ることができた」と述べている。

注目すべきは、柏井がここで自らの日記を「小歴史」と呼んでいることであろう。この背景には、世界の歴史（大歴史）から個人の人生（小歴史）にいたるまで、神の摂理は行き届いているとの柏井の歴史意識がある。柏井が日記をつける意味も、〈経験としての歴史〉を書きとめることにあったのではないか。いずれにせよ「摂理」と「恩寵」の関係の問題が、今後柏井において問われていくこととなる。

## おわりに

以上、新資料としての柏井の米国留学日記の一部の翻刻とその解題を試みた。柏井の留学日記は、空白に近かった

留学時代の前半、ことにユニオン入学の事情や留学中の研鑽内容等について知り得る重要資料といつてよい。なお残されている留学の空白部分に光を当てるためには、所在は未確認だが在米の柏井資料の〈発掘〉が必須の課題となる。また《日記》にみえる思索の跡が柏井の神学思想形成に反映していく過程については、柏井が公にした文章と日記との照合の作業を通して明らかにされていかなければならない。

〈注〉

(1) 《日記》の最初の二日間の記述は次の如くである。

八月二十四日朝三時起き出で朝飯を済ませて家人に別を告げ新橋に向ふ 父上と島崎の叔母と見送れり 光蔵を抱き行く 夜明け前新橋に至れば明し 平井三松大野五来の諸氏来り送る 平井三松二氏は品川まで同車す □の人も皆品川にて下車す 柏木氏来り同車して横浜に至る 弁天町福井屋に車を馳せ市村光二氏の室に宿す トラフォームの検査□□なりとの事を聞き渡辺暢氏を訪ひて黒沢といへる眼科医に紹介を頼み其より市中を散歩して柏木氏と四人にて牛肉屋にて昼飯を喫し柏木氏と二人にて黒沢氏の家に行く 診察の上少しく類似の□□ありとて二三を切り去り点眼薬を与えらる 或は明日の検査は危しとの事なり 心配に堪へず 宿に帰りて速に薬を点じ水にて目を冷やしなどす 夕方光氏と棧橋に散歩す 夜早く休む

二十五日六時朝飯を終へ七時より車にて平沼の検疫所に行く単物のままにて帽子もかぶらずお□□風なり 九時ごろより目の検査はじまる □□カットとの一言を告げられしときの安心、又其より湯に浴し車にて帰る時の喜び云はん方無し 宿に帰れば森岡、大野、小倉、山田、土□の諸氏来り居れり共に宿を出て水上警察署の前にて長き間待たされ身元調済みて乗船す 一行三人〔光・市村・柏井〕と二宮〔貞〕氏と四人にて四畳位の一区を占領す 渡辺暢氏八戸厚一郎氏秋元茂□氏等来り送る 午後二時船錨を抜く 山田土□二氏は棧橋にて立ちて見送る 港外にて一時間半程停船にて水上警



察の□□あつて後進行を始む 観音埼を過ぐる頃日西に没し紫烟三浦半島を包みて三日月はその上に懸かり一艘の帆船其影を海面にみせる景色画も亦及ばず 房州の沖には漁船の燈いくつか動くを見たり 今日甚だ暑き日なり 海風涼しけれども日中の暑容易にさめず夜晩くまで甲板の上にて涼み十時ごろ室に入りて眠る 海上穩にて船動揺せず

英国の前首相サリスベリイ候死するの訃音新聞紙に載れり

(2) ニューヨークで客死した市村のためにノッスが寄せた追悼文は、この間の事情を詳しく伝えている。

聖職に就くために勉強することを決心し、彼の牧師「高知教会・吉岡弘毅」の勧めによつて、一八八九年の秋、「仙台の東北学院」に入校した。彼に影響を与えたのは、押川方義と我々伝道会 (mission) の評判と、恐らく奨学金制度の援助を必要としていたという事実であろう。彼はしばらくの間故ダニエル・ミラー夫人の援助を受けていた。しかし彼は独立することを望み、一八九五年に私が仙台に到着した時、彼は私の日本語教師となつてくれた。土佐の人々の言葉や発音はとてもはきはきとして明確であるため、私は彼が先生であることに幸運を覚えた。彼はすべてにおいて男らしく、気さくで友好的であつた。私の日本語と日本の状況についての知識は彼に負うところが多い。宣教師が皆、彼のような友人を得られるといいのだが。

一八九七年に神学校を卒業し、彼は福島盆地での六年間の伝道に入った。(中略)

彼は伝道者としての労働に肉体的にも精神的にも大変つかれてゐた。そのために、我々は日本の伝道者の指導者を研修のためにアメリカへ派遣する計画をつくり、満場一致で彼を第一号の派遣者として在米委員会に推薦した。しかし委員会はその計画を承認しなかつた。そして、イチムラ氏は支援を得られる確約がないままアメリカへと思ひ切つて行くことを決心した。ニューヨーク市のユニオン神学校の代表のチャールズ・カスバート・ホール博士が昨年(一九〇三)の春に仙台を訪れた際に、私は彼にイチムラ氏について話をしてゐた。その後文通が続ぎ、その結果として彼がニューヨークに着いた時、その神学校最初の新しい「東洋奨学金」を受給できるようになつてゐた。こゝで彼は日本で一五年間宣教師としての経験を持つジョージ・ウィリアム・ノックス教授に主に師事した。(中略)

最後の日が突然にやってきた。原因は慢性の肺結核で、肺だけでなく腸も冒されていた。彼は彼の人生を導いたキリスト信仰の栄光のなかで亡くなった。彼がアレンタウンでの休暇中に書いた日記を見たことのある親しい友人「柏井」は、いかに神の御心が意識せずに彼を人生の終りに向かって準備させていられたか、そこに書いてあったという。

ホール学長が彼の葬儀と埋葬とを第一長老教会のブルックリンにあるグリーンウッド墓地で行うように手配した。一日夜、英語の告別礼拝がノックス博士と筆者の介添えのもとホール博士によって神学校のチャペルで行われた。我々の教会からはバーソロミュー博士とロバート・M・カーン牧師が参列した。ホール博士は棺の上に日本の軍旗をかけさせ、「イチムラ氏の死は神の奉仕に尽くした兵士の栄光の死であり、同じ旗のもとで戦った者のなかで彼以上の兵士はいなかった」と言って彼の葬儀の辞をしめくくった。次の朝、ホール博士と私が六人の日本人の信徒を伴って遺体を墓地へと運んだ。日本語での礼拝は光小太郎牧師と柏井園教授の介添えで私自身が行った。

（クリストファー・ノックス「イチムラ タケマ牧師の生涯を偲んで」、『米国改革派教会時報』（REFORMED CHURCH MESSENGER）一九〇四年十一月、田村喜代治『北光社探訪——明治三〇年代の手紙が語る開拓者群像——』北見北光キリスト教会内北見虹の会、一九九三年、一七九—一八一頁）

(3) 柏井、ノックス、ホールが同席した仙台における春期学校については、次のような予告と報告記事によって知られる。

○基督教春期学校

講師及び演題（確定の分）

- 一、基督伝講義（五回） 柏井園君
- 一、約百記を読む 落合吉之助君
- 一、近世科学と万有神教 出村悌三郎君
- 一、宗教と道徳の關係 ノックス君
- 一、比較的宗教 デフォレスト君

一、題未定

笹尾象太郎君

場所南町通東北学院講堂。期間自四月一日至四月五日時間毎日午前九時より正午まで(予定)三十一日午後六時半開校式、六日親睦会。聴講料金十五銭

『東北教会時報』第二卷第二十三号、一九〇三年三月九日)

霞の中花の下情的宗教心の勃興に連れ受難週をば迎へて主イエスの十字架を心底に刻むべき今日此頃春期学校は優渥なる神の恩寵のもとに開かれ申候。其間ホッラル博士の講演も有之五城の教界一きは春めきわたり候。左に春期学校の概況申上候

三月三十一日の夜開校式、シュネーダー校長の祈祷笹尾講師の式辞鈴木小助氏の祝辞教役者総代片桐牧師の祝文及び柏井講師の紹介挨拶等有之雨を冒して集ひし者百名余△四月一日柏井講師基督伝第一回「基督の受洗」出村講師「近世科学と万有神教」来校者二百名弱此夜感話会有之五六の兄弟切実なる所感を述申候△二日柏井講師第二回「基督の誘惑」笹尾講師「使徒保羅人物談」終りて撮影△三日柏井講師第三回「伝道の経綸」落合講師「約百記を読む」第一回△四日柏井講師病氣にて休講落合講師「約百記を読む」第二回△五日デフォレスト講師「比較的宗教」ホール博士の挨拶△六日柏井講師第四回「奇蹟と教訓」ノッス講師「宗教と道德の關係」終りて閉校式を挙げ委員総代の式辞佛教徒田子氏の在在所感シュネーダー校長の祈祷を以て芽出度閉校(中略)猶同校友会主となり五六日午後ホール博士を招じて一場の講演を請ひ青年男女の爲めに有益なる会合有之候。講演題は「基督の神性」「基督教信仰の吾人の品性陶冶に及ぼす影響」に候

(「仙台だより」『福音新報』第四〇七号)

(4) 市村宛の柏井書簡は、次の如くである。

拜啓 小生事御別れ申し候翌朝一〇時上野着、都は桜花満開花見の客は雲の如く上野を填め居候。家に帰るに遅なく直に中会会場に車を飛ばし候様の次第にて、爾来三日間昼は会議、夜は田舎の泊り客にて、今日漸く身の我がものとなりし

心地にて、今日までご無沙汰申上候。いまだに魂の幾分は東北の天に残り候やうに感じ候。大兄とかく親むことを得たることは二〇年来之れなかりし事にて愉快不能禁、病氣の際にうけし御世話や、夜半桑折ステーションまで急に御送り被下候友情や、一々御礼申し尽きず候。何卒御令室様に又御同居の方に宜敷御伝声申上度候。

又大兄の御尽力の甲斐ありて一五人の人々が洗礼を受くるに至りし事は、小生まで得意を以て人に誇り居り候。

小生今度の中会にて試験をすませ候。按手礼は未だに候。大兄も是非<sup>ハズカシ</sup>とならんことを希望に不堪候。出来得べくば、今夏はともに太平洋上の月を眺めて快談致し度ものに候。

草々頓首

四月一〇日

園

市村大兄机下

〔『福島伊達教会百年史 控（一）明治篇』、二〇〇一年十二月、日本基督教団福島伊達教会、二〇二―二〇三頁〕

なお、この書簡の背景については、次の記述が参考になる。

〔一九〇三年〕四月六日に「福島県」長岡講義所に於て、演説会及洗礼式が行われた。「四月六日、長岡講義所に於て演説会あり。飯坂教会より紺野・半田・服部・大橋・村上惣の五名出席せり。此夜村上惣太郎氏受洗せり。外に余目村、長岡の兄弟姉妹合計一五人の受洗ありたり。講師は梶原（長八郎）、柏井の二氏なりき。」（中略）

飯坂教会日誌は四月六日の長岡講義所における梶原、柏井の演説会及び授洗式のあと、八月一六日の市村留学渡米の送別会にとぶ。（中略）柏井は、市村と同じく土佐出身、市村より三才年下で、又同じく高知教会グリーン宣教師により受洗した。後京都同志社に学び、卒業後郷里高知英和女学校で教鞭をとっていたが、二年後植村正久の奨めで東京明治学院に移り、長岡の演説会から帰京した翌月、則ち明治三六年五月、同学院神学部教授に任じられたといふ。（中略、柏井書簡引用）

これを見ると、「一九〇三年」四月一〇日現在、市村も柏井も夏には留学渡米に出発していることが既定の方針であることがわかる。強いていえば事前に教師の資格を得ておくこと、少なくともその方が非常に好都合であることであろうか。柏井が帰京を急いで教師試験をすませた事も納得できる。おそらく市村は四月六日は飯坂・長岡の最後の集会になることを予想して、竹馬の友、又明治学院に在って神学を講じ、留学も共にするであろう柏井を弁士に招じたものであろう。市村亦四月二日から始まった宮城中学で教師試験をうけ、二二日、「試験委員梶原氏試験之結果報告」シ、市村、光（晋）二氏の試験ヲ可」とされ、市村は翌二三日仙台教会で按手礼が執行された。

〔『福島伊達教会百年史 控（一）明治篇』、二〇〇一年十二月、日本基督教団福島伊達教会、二〇〇一—二〇三頁〕  
傍線部に関しては、前述した春期学校の帰途（春期学校は四月六日午前で終了）長岡に立ち寄り演説するよう、市村が柏井に請うたという方が認識としては正しいだろう。